

中学校歴史学習の工夫と改善

——「世界の歴史を背景とした日本の歴史」の学習のありかた——

有 田 嘉 伸*

(平成9年10月31日受理)

A Device and Improvement of Teaching History in the Junior High School

Yoshinobu ARITA

(Received October 31, 1997)

1 はじめに

現在、わが国の学校教育で行われている歴史学習は、小学校では社会科のなかで、中学校では社会科歴史的分野によって、高等学校では地理歴史科の科目で行われている。小学校では「人物・文化遺産を中心とした主題史的学習」を、中学校では「世界の歴史を背景とした日本の歴史の学習」を行っている。高等学校では、地理歴史科のなかに日本史A、日本史B、世界史A、世界史Bの4科目がおかれているが、日本史Bは「文化の総合的学習」を行うこととされている。このように、日本の歴史についての学習は、小学校・中学校・高等学校と3回行われるが、実際の授業は、同じような内容構成の日本の通史を、詳しくだけ変えて繰り返しているに過ぎない(うす墨論)と批判されている。本稿では、中学校歴史的分野を中心に「世界の歴史を背景とした日本の歴史」の学習のありかたについて検討し、歴史学習の改善のための一方策としたい。

2 平成元年版学習指導要領における世界史的内容の取り扱い

平成元年版学習指導要領⁽¹⁾における中学校社会歴史的分野の基本「目標」は、「我が国の歴史を、世界の歴史を背景に理解させ、それを通して我が国の文化と伝統の特色を広い視野に立って考えさせるとともに、国民としての自覚を育てる」こととされ、これまでと同様、通史の日本史に重点を置きながら、その背景となる世界の歴史を主題史的にはさみこむかたちが継承されている。

「内容」では、大項目が、昭和44年版の18、昭和52年版の10からさらに削減され、平成元年版は9つの大項目からなっている。それらは、(1)文明の起こりと日本、(2)古代国家の歩みと東アジアの情勢、(3)武家政治の展開とアジアの情勢、(4)世界の動きと天下統一、(5)幕藩体制と鎖国、(6)世界情勢の変化と幕府政治の行き詰まり、(7)近代日本の歩みと国際関係、

*長崎大学教育学部社会科教育研究室

(8)二つの世界大戦と日本、(9)現代の世界と日本、である。

昭和44年版では、(7)ヨーロッパ世界の形成、(12)ヨーロッパ世界の発展、(13)欧米諸国のアジア進出、など、世界史の独立した大項目が日本の通史の中には含まれる形で存在していた(サンドイッチ方式)⁽²⁾が、昭和52年版に続いて平成元年版でも世界史の独立した大項目はなく、日本の歴史と世界史との関連づけをはかる努力が見受けられる。

各大項目で扱うこととされている世界史的内容をみると、(1)では、「人類が、それぞれの地域の自然環境に対応しながら特色ある文明を築きあげていったこと」を理解させることとされ、世界の古代文明が扱われる。(2)では、「大陸の文物・制度を積極的に取り入れて古代国家が形成されたことを、当時の東アジアの動きと関連させながら理解させる」こととされ、大和朝廷時代の中国や朝鮮の様子が扱われる。(3)では、「武家社会が発展していった大きな流れをアジアの動きと関連させながら理解させる」とされ、蒙古の襲来や日明貿易が扱われる。(4)では、「ヨーロッパ人が来航した背景及びヨーロッパ文化の伝来とその影響について理解させる」が、特に「ア ヨーロッパ人の来航の背景と影響」という中項目があり、ここでは、「ルネサンスと宗教改革、ヨーロッパ世界とイスラム世界との接触及び新航路の開拓などヨーロッパ人の来航とその背景を扱い、ヨーロッパ文化の伝統とそれが我が国の社会に及ぼした影響について理解させる」ことになっている。(5)では、日本の江戸時代が扱われ、世界史関係では、江戸幕府と「オランダ、清との交易」に触れる程度である。(6)では、「欧米諸国の近代社会への発展と海外への進出を背景に、19世紀前半から開国、幕府の滅亡までの我が国の動きを理解させる」が、特に「ア ヨーロッパ近代社会の成立」という中項目が「ヨーロッパにおける市民革命、産業革命、近代科学と文化の発達などを扱い、ヨーロッパの近代社会の成立と海外への進出のあらましを理解させる」ことになっている。(7)では、「明治維新とそれ以後の近代日本の発展の過程を」「アジアにおける国際関係などを通じて理解させる」こととされ、日清戦争・日露戦争や条約改正が取り扱われる。(8)は第一次世界大戦後、(9)は第二次世界大戦後の現代史であるため、日本の歴史と世界の歴史との関連は、他の項目以上に深く関連づけて扱うこととされているが、(8)では、第一次世界大戦とその背後にある国際関係、ロシア革命、第一次世界大戦後の国際協調、1930年代の国際関係、我が国の政治・外交の動きと中国などアジア諸国との関係などが扱われ、(9)では、「第二次世界大戦後の世界の動きのあらまし」について理解させ、「現代の世界の状況とそこでの我が国の役割について考えさせる」こととされている。

また、「内容の取扱い」では、内容の(1)のアの「古代文明」については、「その文化的特色に触れる程度とする」こと、内容の(4)のアについては、「ヨーロッパ世界とイスラム世界とのかかわり及びヨーロッパ人が来航した背景を中心に理解させるよう留意する」こと、内容の(6)のAでは、「『市民革命』についてはイギリスとフランスを、『産業革命』についてはイギリスを中心に引き上げ、欧米諸国がアジアに進出するようになった背景を理解させる」こととされている。内容(8)については、「世界の動きと我が国との関連を重点的にとらえさせるとともに、国際協調と国際平和の実現に努めることが大切であることに着目させる」こと、内容(9)については、「第二次世界大戦後の世界の歴史の大きな流れと我が国が再出発して今日に至った経過について大観させる」こととされている。

3 教科書の記述にみる世界史的内容

学習指導要領は学習内容の大枠を示したものであり、実際の歴史の学習に直接大きな影響を与えるのは教科書である。そこで、次に教科書に記述された世界史的内容を見てみよう。現在、中学校社会の教科書は、8社から8種類が発行されているが、その中で最も多く使用されている東京書籍発行の『新しい社会 歴史』（平成5年発行）を分析の対象とする。⁽³⁾

この教科書は、学習指導要領の大項目と同じように、9章からなっている。各章は、第1章 文明のおこりと日本の成り立ち、第2章 古代国家の歩みと東アジアの動き、第3章 中世社会の展開と東アジアの情勢、第4章 世界の動きと天下統一、第5章 近世社会の発展、第6章 近代ヨーロッパとアジア、第7章 近代日本の歩み、第8章 二度の世界大戦と日本、第9章 現代の日本と世界、である。

第1章では、第1節で人類の誕生と農耕・牧畜の開始を、第2節でエジプト文明、メソポタミア文明、ギリシア文明、ローマ帝国とキリスト教、インドの文明と仏教、中国の黄河文明から秦・漢帝国までを扱い、また朝鮮の高句麗について触れている。第3節では邪馬台国との関連で中国の三国時代が、大和国家との関連で中国の南北朝時代と朝鮮の百済と新羅が扱われている。

第2章では、第1節で隋・唐と6世紀の朝鮮が、第2節で新羅による朝鮮の統一が、第3節で唐の滅亡と宋の成立、高麗の成立、ベトナムの独立が、第4節で宋の社会と文化が扱われている。

第3章では、第1節で鎌倉幕府と鎌倉文化を扱ったのち、第2節でモンゴル帝国の成立、元寇と鎌倉幕府の滅亡、倭寇と日明貿易、明代の東アジアの情勢が、第3節で室町幕府と戦国時代が、第4節で室町時代の文化と社会が扱われている。

第4章では、第1節で西ヨーロッパの成り立ちから封建社会、十字軍、中世都市の繁栄と王権の強化までのヨーロッパ世界の歴史とイスラム世界の発展を、第2節でルネサンス、宗教改革、大航海時代から16世紀ころまでのヨーロッパ世界の展開を、それぞれ日本の歴史から独立して扱っている。また、第3節で鉄砲・キリスト教の伝来と織田・豊臣の天下統一が扱われているが、秀吉の朝鮮侵略は独立した小項目とされている。

第5章では、江戸幕府の成立から享保・寛政の改革までの日本の歴史展開を扱うなかで、鎖国の実態や蘭学の始まりなどが扱われている。

第6章では、第1節でイギリスの絶対主義と市民革命、フランス革命とナポレオン時代が、第2節でイギリスの産業革命とその影響、インドの植民地化が、第3節でアメリカの独立と南北戦争、19世紀のヨーロッパ諸国の展開、アヘン戦争・太平天国とアジアの植民地化などが、それぞれ日本の歴史から独立して扱われている。また、第4節で外国船の出現、天保の改革と諸藩の改革などが、第5節で開国と江戸幕府の滅亡が扱われている。

第7章では、第1節で明治維新と新政府の諸改革が、第2節で自由民権運動と立憲政治の始まりが、第3節で日清戦争・日露戦争と近代日本、朝鮮の植民地化、中華民国の成立などが、第4節で日本の近代産業の発展と教育・文化が扱われている。

第8章では、第1節で第一次世界大戦、ロシア革命、大戦後のヨーロッパやアジアの様子が、第2節で第一次世界大戦後の日本の社会が、第3節で世界恐慌とその後の各国の動き、日本の動きと中国への侵略が、第4節で第二次世界大戦、太平洋戦争と日本を含む枢

軸国の敗北が扱われている。

第9章では、第1節で第二次世界大戦後の日本の民主化が、第2節で国際連合の成立、冷たい戦争、アジア諸国の独立、朝鮮戦争などが、第3節で1950年代以降現在までの世界と日本の様子が扱われている。

次に、各章の記述が、「世界の歴史を背景にした日本の歴史」になっているかどうかを見るために、各章が扱っている内容の時代を、日本と、世界の主要地域に分けて調べてみると、表1のようになっている。

表1 中学校歴史的分野教科書の各章で取り扱われている地域別の時代

地域 章	アメリカ	ヨーロッパ	西アジア	南アジア	東アジア	日本
第1章		前3000～後400	前4000～前330	前2500～後400	前1500～後589	1万年前～後700
第2章					589～1279	500～1167
第3章					1206～1392	1185～1573
第4章	1200～1533	350～1642	570～1270		1592～1596	1543～1598
第5章					1616～1868	1600～1866
第6章	1600～1865	1534～1895		1526～1858	1750～1864	1800～1868
第7章		1891～1905			1871～1912	1868～1911
第8章	1917～1945	1914～1945			1915～1945	1914～1945
第9章	1945～	1945～	1945～	1945～	1945～	1945～

これから分かることは、①東アジアの歴史は日本の歴史と関連づけながらほぼ全時代が扱われている、②ヨーロッパの歴史は東アジアの歴史に次いで多く扱われているが、第4章、第6章などでは独立した扱いになっており、日本の歴史との関連づけが十分でないところもある、③アメリカ・西アジア・南アジアなどの扱いは断片的、トピック的であり、各地域の系統的な歴史展開は記載されていない、④第4章・第5章・第6章などは日本の歴史と世界の歴史が時代的に対応していない、などである。

総じて、世界史的内容の記載は少なく、日本の歴史中心の構成になっており、また、世界史的内容の記述形式は、高等学校の「世界史」の記述を簡略化したものもあり、主題史的記述とみなすには十分ではない。

4 教科書に記載されている世界史的事項

次に、教科書に記載されている世界史的事項を、「人物」と、「その他の歴史的な名辞」に分けて調べたのが表2、表3である。調べる対象は、本文だけでなく、脚注や図版説明も含めたが、「テーマ学習」だけに記載されている細かい事項で省略したものもある。また教科書は、同じく東京書籍版を使用した。

(1) 人物

表2 中学校歴史的分野教科書に記載されている世界史関係の人物

	アメリカ	ヨーロッパ	西アジア アフリカ	南アジア 東南アジア	中 国	朝 鮮
政 治	ワシントン リンカーン ウィルソン ルーズベルト マッカーサー	アレクサンダー大王 エリザベス1世 クロムウェル ルイ16世 ナポレオン レーニン スターリン ヒトラー ムソソリーニ ゴルバチョフ	ハンムラビ王 クレオパトラ	ラクシュミー=バハイ ガンディ ホー=チ=ミン ネ ル ー	武 帝 チンギス=ハン フビライ=ハン 洪 秀 全 孫 文 袁 世 凱 蔣 介 石 毛 沢 東 周 恩 来	広開土王 李 成 桂 金 日 成 ノ = テ ウ
宗 教		ル タ ー カルバン ザビエル	イ エ ス マホメット	シ ャ カ	玄 奘	
思 想		ソクラテス ロ ッ ク モンテスキュー ル ソ ー			孔 子	
文 学		ダ ン テ シェークスピア ゲ ー テ			李 白 杜 甫 白 居 易 魯 迅	
芸 術		ダ=ヴィンチ ミケランジェロ ベートーベン ロ ダ ン				
自 然 科 学		ガリレイ コペルニクス グーテンベルク ニュートン				
社 会 科 学		アダム=スミス マルクス エンゲルス ダーウィン				
旅 行 ・ 探 検		マルコ=ポーロ コロンブス バスコ=ダ=ガマ マゼラン				
その他		アンネ=フランク				

記載されている人物は70名で、それらを地域別にみると、ヨーロッパが37名（53%）と過半数を占め、ヨーロッパ中心史観は中学校教科書でも解消されていない。次いで中国が15名（21%）、アメリカと南・東南アジアがそれぞれ5名（7%）、朝鮮が4名（6%）と

なっている。

関係領域別にみると、国王・皇帝・政治家など政治関係の人物が34名（49%）と約半数を占め、歴史的分野の記述が政治史を中心になされていることが分かる。次いで宗教家、文学者が各7名（10%）、思想家5名（7%）、旅行家、自然科学者、社会科学者、旅行・探検家が各4名（6%）で、その他1名（1%）となっている。

(2) 人物以外の歴史的名辞

表3 中学校歴史的分野教科書に記載されている世界史関係の歴史的名辞

	世界	アメリカ	ヨーロッパ	西アジア アフリカ	南アジア 東南アジア	中国	朝鮮
国名・ 人種名・ 民族名		アステカ帝国 インカ帝国 インディオ インディアン	アテネ スパルタ マケドニア ローマ帝国 西ローマ帝国 東ローマ帝国 プロシア オーストリア ドイツ帝国 イタリア王国 セルビア ソ連 エストニア ラトビア リトアニア 独立国家共同体 クロマニオン人 ゲルマン人	ペルシア帝国 イスラム帝国 イスラエル オーストラロ ピテクス ユダヤ人 アラブ人	ムガル帝国 フランス領インドシ ベトナム共和国 ベトナム民主共和国 ベトナム社会 主義共和国 ジャワ原人 アリア人	殷・周 秦・漢 春秋・戦国時代 南北朝時代 魏・呉・蜀 隋・唐 モンゴル帝国 宋・元 明・清 中華民国 中華人民共和国 ペキン原人 満州人	高句麗 百濟 新羅 高麗 李氏朝鮮 大韓帝国 大韓民国 朝鮮民主主義 人民共和国
地名・ 都市名		サンサルバドル島	ハーメルン サラエボ ペトログラード スターリングラード	メッカ バグダッド イスファハン エルサレム	モヘンジョ=ダロ ゴア マラッカ マニラ	長安（西安） 大都（北京） 広州・南京 上海・香港 天津・武昌 沿海州 山東省	楽浪郡 巨文島
政治 関係	帝国主義 第一次世界大戦 パリ講和会議 ベルサイユ条約 国際連盟 ワシントン会議 ロンドン軍縮会議 日独伊三国同盟 第二次世界大戦	独立宣言 合衆国憲法 南北戦争 奴隷解放宣言	ボリス 十字軍 無敵艦隊 絶対王政 清教徒革命 名誉革命 権利章典 市民革命 パスチーユ牢獄	中東戦争	セボイの乱 ベトナム独立同盟 南ベトナム解放 民族戦線 ベトナム戦争 東南アジア諸 国連合	律令 アヘン戦争 ナンキン条約 太平天国 アロー戦争 義和団事件 辛亥革命 三民主義 二十一か条の要求	朝鮮侵略 義兵闘争 韓国併合 三一独立運動 創氏改名 朝鮮戦争

政治関係	太平洋戦争 ヤルタ協定 ポツダム宣言 国際連合 冷たい戦争 NATO ワルシャワ条約機構 ベルリン封鎖 アジア・アフリカ会議 サンフランシスコ講和会議 サンフランシスコ平和条約 INF 全廃条約 戦略兵器削減条約		フランス革命 1848年の革命 パリ=コミュニオン クリミア戦争 選挙法改正 三国協商 三国同盟 ソビエト ロシア革命 ワイマール憲法 ナチス ファシズム 独ソ不可侵条約 日ソ中立条約 日ソ共同宣言 ヨーロッパ共同体 プラハの春 ペレストロイカ ベルリンの壁			五・四運動 中国共産党 長征 中ソ友好条約 中ソ対立 文化大革命	
経済関係	世界恐慌 石油危機	大陸横断鉄道 ニューデール	大航海時代 マニュファクチュア 産業革命 資本主義 ブロック経済 チェルノブイリ 原子力発電所		NIES	シルクロード 均田制 租庸調 倭寇 勘合貿易	
社会関係			封建制度 ドイツ農民戦争 社会主義		カースト制 バラモン		
文化関係			ヘレニズム文明 コロセウム キリスト教 ビザンチン文化 ギリシア正教 ローマ法王 ラテン語 シャルトル大聖堂 ブリュージュ大聖堂 ルネサンス 神曲 ダビデ像 免罪符 プロテスタント 宗教改革 イエズス会 ピューリタン 法の精神 社会契約論 人権宣言 ファウスト ロマン主義 諸国民の富 共産党宣言 種の起源	ピラミッド スフィンクス ハンムラビ法典 くさび形文字 象形文字 太陽暦 エジプト文明 メソポタミア文明 七曜制 六十進法 アルファベット イスラム教 アラール コーラン モスク	インダス文明 仏教 ヒンズー教	黄河文明 甲骨文字 漢字 殷墟 万里の長城 儒学（儒教） 魏志倭人伝 唐三彩 隋書倭国伝 朱子学 陽明学 西遊記 阿Q正伝	ハングル 朝鮮通信使

表3にあげた歴史的な辞のうち、本文中にははっきりした歴史的な辞としては記載されていないが、索引に採録されているために記載事項として取り上げたものが少数ある。また、国名や地名・都市名のうち、普通名詞と同じ程度によく知られているもの（イギリス・フランス・ロシアなど）は取り上げていない。

この表からいえることは、①世界に関わる事項は、第一次世界大戦以後、現在までの政治に関するものがほとんどである、②地域別にみると、人名同様ヨーロッパ関係のものが圧倒的に多く、次いで中国に関するものが多い、③ヨーロッパに関するものは、政治・経済・社会・文化のすべてにわたっている、④西アジアに関するものは、古代の文化史に関するものが多い、⑤中国や朝鮮の王朝名は、ほぼすべて記載されている、⑥中国や朝鮮の事項は、日本と関わりのあるものが多い、などである。

5 日本の歴史と世界の歴史の関連づけ

日本の歴史と世界の歴史を関連づけるためには、その視点として、次のようなことが考えられる。⁽⁴⁾

(1) 日本の歴史の中の人物や文化遺産、諸制度の中に存在する「世界」を見つける。

例えば、遣隋使を派遣した聖徳太子を取り上げて、6～7世紀の東アジアの国際関係史のなかに位置づけたり、有田焼の発展と秀吉の朝鮮侵略時に連行された朝鮮人陶工による技術移転の関係をさぐったり、日本の律令制度に対する唐の律令制度の影響を見つけたりするのである。

(2) 世界の歴史の中の人物や文化遺産、諸制度の中に存在する「日本」を見つける。

例えば、李舜臣を取り上げ、秀吉の朝鮮侵略を壬辰の倭乱としてとらえたり、中国の近代化や辛亥革命に及ぼした日本の明治維新の影響をさぐったり、ワシントン会議が開かれることになった背景と日本との関わりを考えていく。

(3) 人・物・学問・技術・事件などを通して、日本と世界との接触・交流を見る。

人の交流については、鑑真・空海・ペリーなど個人を中心に見る場合のほか、遣唐使・天正少年使節・朝鮮通信使など集団全体で交流の実態や意義を考えていくことも可能である。

物・学問・技術の交流では、銅・銀・生糸・絹織物などの貿易品や仏教・儒教や文字・製紙法・活字印刷術・鉄砲などの学問・技術を対象とし、それらの輸入や伝来が人々の生活や意識をどのように変えていったかを見ていく。

また、異国間の交流は、貿易など平和的なものばかりとはいえ、侵略・統一・戦争など武力を伴った不幸な交流も多く、それらは事件と呼ぶにふさわしいであろう。

6 「世界の歴史を背景とした日本の歴史」の内容構成

歴史の内容構成・学習方法には、大きく分けて通史的方法と主題史的方法がある。通史的方法は歴史の発展や因果関係などの系統性を重視するため、歴史の起こった順に古い時代から新しい時代へと学習していくのである。一方、主題史的方法は、高等学校の「世界史」・「日本史」などで行われている「主題学習」や中学校社会に導入された「課題学習」などで、特定の時代・地域や設定したテーマについて、多方面から広く、あるいは深く学習していくのである。

「日本の歴史」と「世界の歴史」を「通史的方法」と「主題史的方法」とに組み合わせていくと、次のような幾通りかの内容構成が考えられる。⁽⁵⁾

(1) 「通史の日本の歴史」と「通史の世界史」を対等に位置づけ、「世界史」を先に学習させる。

これには、1960年代に歴史教育者協議会の加藤文三氏⁽⁶⁾などの主張や、同じころ、東京教育大学附属中学校⁽⁷⁾やお茶の水女子大学附属中学校⁽⁸⁾で実験的に実践されたものがある。

(2) 「通史の日本の歴史」と「通史の世界史」を対等に位置づけ、「日本の歴史」を先に学習させる。

中学校歴史的分野を日本の通史と考えた場合、歴史的分野と高等学校の「世界史」の関係はこれにあたる。また、1960年代、教育科学研究会の青木生夫・斎藤巖夫氏⁽⁹⁾らは、中学校の歴史的分野では、日本史の通史学習を内容とするたてまえから、世界史の通史的な学習は高等学校に移すべきだと主張した。

(3) 「通史の日本の歴史」に重点をおき、その中に「主題史の世界史」をはさむ。

現在、中学校の歴史的分野はこの方式をとっている。この方式の長所として、かつて文部省は、①日本史の事象と世界史上のそれとを比較できる、②日本史の世界史的背景を理解したりするのに効果的である、③独立させた学習でおこりやすい重複を避けることができる⁽¹⁰⁾、の3点をあげたが、一方で、学習の対象となる国が転々として変わり、扱いにくく、理解しにくい「サンドイッチ方式」として批判もされてきた。

(4) 「主題史の日本の歴史」に重点をおき、その中に「世界の歴史」をエピソード的にはさむ。

小学校の歴史学習では世界史的内容はほとんどないが、わずかにある世界史的内容はエピソード的なものに過ぎない。

「世界の歴史を背景とした日本の歴史」としては、「日本の歴史」と「世界の歴史」を独立させてどちらかを先習させるのがよいか、「日本の歴史」の中に「世界の歴史」はさみこむ「サンドイッチ方式」がよいか、議論が分かれるところであろう。

さらに、もうひとつの方法として、「日本の歴史」と「世界の歴史」を融合する方法がある。高等学校「世界史」の内容の改善策として、「世界史」の中にもっと日本の歴史の内容を多く取り込むことの必要性が主張されているが、「世界の歴史を背景とした日本の歴史」のためには、日本の歴史をアジアの歴史の中に取り込んだ「アジアの中の日本史」という構成が考えられる。そのような視点から書かれた教科書は未だ出されていないが、研究書としては、『アジアのなかの日本史』（東京大学出版会、5冊）などがある。同書のねらいは、アジアを色眼鏡でさげすんだり、あるいはアジアの1、2の国をお手本として祭り上げたりすることなく、より冷静かつ主体的な眼でアジアをみつめ、アジアとのあるべき関係を模索することにある。そのために、日本とアジアとの関わりの歴史的な展開を、＜アジアのなかの日本＞（アジアにおける日本の個性と役割、アジアに進出した日本人、など）および＜日本のなかのアジア＞（日本社会のアジア的特質、日本社会に取り込まれたアジア人、など）という両方向から跡づけることを通して、どのような遺産が日本人のアジアを見る眼に継承されているかを、見定めていく必要がある。同書は、そのための基本的な視点として、①＜民族＞の視点（日本の単一民族国家幻想から脱却し、国家的枠組みや時代的限定から相対的に自由な、文化人類学の＜民族＞概念）、②＜地域＞の視点（僧侶・海

賊・商人などの多様な人間類型のになう多面的な交流を具体的に認識する枠組みとして、国家を超えた<地域>という場を設定し、この<地域>を、ある国家内の独特の個性をもつ地域的まとまりとの関連において把握する)、③<比較>の視点(アジアの諸国家・諸民族社会と日本のそれとを、客観的にかつ相互連関を念頭において比較することによって、両者の共通性と差異を、相互規定的かつ歴史的に把握する)、をあげている。⁽¹¹⁾

以上の視点を具体化して、「アジアのなかの日本史」の構成に必要な条件を考えると、次のような諸点となるであろう。⁽¹²⁾

(1) 日本史独自の時代区分を改め、日本列島を含むアジア全体の史的展開を、ある統一的な基準に照らして区分するという新しい時代区分を考える。⁽¹³⁾

(2) 縄文時代・弥生時代、大化の改新、国風文化、元寇、鎖国など、日本史固有の概念の見直しをはかる。

(3) <日本=島国>論を克服し、環シナ海、環日本海など海を介した文化交流圏に注目するとともに、日本とアジアとの関わりを<国家と国家>との間の国際関係としてのみとらえない。

(4) 日本人の、<国家=天皇>へのもたれかかりを克服するとともに、<日本=単一民族国家>観を脱却する。

(5) ヨーロッパ中心の<市民革命・産業革命>型近代化論や近・現代至上主義を克服し、またアジア独自の歴史の展開を評価する。

現在、日本史においても世界史においても、新しい見方や解釈が沢山排出し、歴史学は大きく変貌しつつある。しかし、それらの解釈が、教科書の記述にまで反映されるには、多くの時間が必要となりそうである。歴史の学習の改善のためには、教師が「教科書を教える」だけの学習から脱するとともに、教師ひとりひとりが教材研究と内容構成を工夫することにより、現場から改善していくことが必要であろう。

注

- (1) 平成元年版学習指導要領の引用は、『中学校指導書社会編』(大阪書籍, 1989)による。
- (2) 加藤文三「サンドウィッチよさようなら」(『歴史地理教育』74・75・76・89・91号, 1962~1963), 加藤文三著『歴史教育論の展開』(新日本出版社, 1973), pp. 37~121
- (3) 『中学社会 歴史的分野』(大阪書籍, 1995)を分析した論文に、中村薫「中学校歴史的分野における世界史的内容について」(大阪府高等学校社会科研究会『社会科研究』39号, 1997)がある。
- (4) 原田智仁「歴史授業のワールド化と内容構成」(原田智仁・星村平和編著『歴史授業のワールド化』, 明治図書, 1996), pp. 15~20
- (5) 原田智仁「同上」, pp. 21~22
- (6) 加藤文三「同上」, 本多公栄著『歴史教育の理論と実践』(新日本出版社, 1971)など
- (7) 中川浩一「世界史先習型地歴ヘイコウ学習」, (大森照夫編著『地歴並行学習の指導計画と展開』(明治図書, 1972)
- (8) 酒井綾子「本校における地歴併行学習と世界史先習について」(『お茶の水女子大学文教育学部付中研究紀要』第1集, 1971)
- (9) 青木生夫・斎藤巖夫「中学校の歴史教育」(教育科学研究会・社会科部会著『社会科教育の理論』, 麦書房, 1966)
- (10) 『中学校指導書社会編』(大阪書籍, 1970), p. 265

- (1) 荒野泰典・石井正敏・村井章介編『アジアのなかの日本史 I』（東京大学出版会，1992），pp. ii～iii
- (2) 原田智仁「同上」，pp. 22～23
- (3) 荒野泰典・石井正敏・村井章介「時代区分論」（『アジアのなかの日本史 I』，pp. 1～57）は，日本列島の黎明から日清戦争にいたる歴史の展開を10の時期に区分する仮説を示している。

参 考

- 荒野泰典・石井正敏・村井章介編『アジアのなかの日本史』6冊（東京大学出版会，1992～1993）
- 網野義彦著『日本論の視座』（小学館，1990）
- 網野義彦著『日本の歴史をよみなおす』（筑摩書房，1991）
- 谷川健一・網野義彦ほか著『日本像を問い直す』（小学館，1997）
- 大隅和雄・村井章介編『中世後期におけるアジアの国際関係』（山川出版社，1997）
- 村井章介著『海から見た戦国日本』（筑摩書房，1997）
- 川勝平太著『文明の海洋史観』（中央公論社，1997）
- 歴史教育者協議会編『前近代史の新しい学び方』（青木書店，1996）
- 星村平和著『いまなぜ“新しい史観”か』（明治図書，1997）
- 深草正博著『社会科教育の国際化課題』（国書刊行会，1995）